



Title	口唇、口蓋裂患者の側貌における顔面頭蓋骨の形態学的研究
Author(s)	浜, 健太郎
Citation	大阪大学, 1965, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29036
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について〈/a〉をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	浜 健太郎 はま けん たろう
学位の種類	歯 学 博 士
学位記番号	第 8 0 6 号
学位授与の日付	昭 和 40 年 11 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	口唇、口蓋裂患者の側貌における顔面頭蓋骨の形態学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 永井 巖
	(副査) 教授 西嶋庄次郎 教授 滝本 和男

論 文 内 容 の 要 旨

顎、顔面頭蓋骨の形態学的研究に、レントゲン・セファロメトリーが導入されてから、口唇、口蓋裂に関するこの分野に、外科学的、矯正科学的、補綴学的共同研究がさかんになってきた。しかしながら、口唇、口蓋裂に関する詳細な形態学的研究は、わが国では極めて少なく、ために口蓋裂の形成外科手術の時期、あるいは、手術が顎、顔面骨におよぼす形態的影響などに関しては、未だ不明の点が多い。

本研究は、日本人の口唇、口蓋裂患者の成人における顔面頭蓋骨、ことに、上顎骨および下顎骨の側貌上の状態を明らかにすることによって、口蓋裂の形成外科手術が、顎、顔面頭蓋骨の発育形態にどのような影響をおよぼすかを精査し、ひいては、口蓋裂形成外科手術時期決定にも、一指針を得んとしたものである。

本実験は、対照として本学学生で、口唇、口蓋、顎、顔面頭蓋骨に異常のみとめられなかった健康成人男子30名を撰び、本学附属病院を訪れた口唇、口蓋裂患者のうち、無差別抽出によった成人男子55名とを比較検討したものである。その計測には、レントゲン・セファロメーターを用い、中心咬合位の側貌レントゲン・セファログラムを作成し、トレーシング紙上にこれを透写して、その分析には従来の方法に改良を加え、前脳頭蓋底、後脳頭蓋底、上顎骨、下顎骨、左側上下顎中切歯の各成分にレントゲン・セファログラム上での計測点を定め、前脳頭蓋底を規準にした角度的計測および、トルコ鞍の中心を原点とし、前脳頭蓋底をX軸、これと直交するY軸を設けた直角座標系による線の計測をおこなった。

その成績を統計学的に処理し、側貌からの前脳頭蓋底に対する後脳頭蓋底，上顎骨，下顎骨，左側上下顎中切歯の角度，深さ，高さについて，次の様な結果を得た。

口唇，口蓋裂例と対照例とを比較して，前脳頭蓋底および上顎骨の長さ（ANS-PMF）に差異はみられなかったが，前者の後脳頭蓋底と上顎骨が，後者よりも上，後方に位置していることがみとめられた。下顎骨においては，口唇，口蓋裂例は，対照例に比較して，Menton, Pogonion が後方に，Gonion, Articulare が上方に位置し，下顎角（下顎下縁と下顎枝後縁とのなす角）は開大し， β 角（下顎下縁と Ar-Me のなす角）は狭小で，実効長（Ar-Me）および骨体長（Po-Go）は，いずれも短いことがみとめられた。また，従来の報告にもみられる如く，同上下顎中切歯は，反対咬合を呈しているものが多いことがみとめられた。

口唇，口蓋裂の既形成手術例と対照例とを比較すると，前脳頭蓋底および上顎骨の長さに差異はみられなかったが，前者の上顎骨は，上，後方に位置しており，下顎骨の実効長と骨体長は，いずれも短かく，下顎角は開大し， β 角が狭小であることがみとめられた。又，その上下顎中切歯は，上，後方に位置し，切端咬合か，反対咬合を呈しているものが多いことがみとめられた。

口唇裂の既手術例で，未口蓋形成手術例のものと，対照例とを比較すると，前脳頭蓋底と上顎骨の長さに差異はみられなかったが，前者の上顎骨，下顎骨は，いちじるしく上，後方に位置しており，下顎骨の骨体長と実効長は短かく，下顎角は開大し， β 角は狭小であることがみとめられた。又，その上下顎中切歯は，特に上，後方に位置し，反対咬合を呈しているものが多いことがみとめられた。

口唇裂の既形成手術例中，未口蓋形成手術例のものと，既口蓋形成手術例のものと比較すると，後者の上顎骨，下顎骨，上下顎中切歯は，前者よりも，対照例により近い状態を示し，ことに下顎骨の Gonion, Articulare でこれが明らかにみとめられた。

口唇裂のない口蓋裂例と対照例と比較すると前者の上下顎中切歯が，切端咬合の傾向を示す外は，両者に差異はみとめられなかった。

以上，本研究は，口唇，口蓋裂患者における顎，顔面頭蓋骨の發育完了形態の実態を把握し，更に口蓋裂形成手術の早期，晩期についての手術時期の決定が確立されていない現状において，口蓋裂形成手術がおこなわれたものは，同形成手術がおこなわれなかったものに比して，より顎，顔面頭蓋骨の發育阻害の影響が少なく，ことに下顎骨では，むしろ健康者の發育形態により近い様相を呈していたという興味ある事実を認め，手術時期決定の再検討に一指針を得た。

論文の審査結果の要旨

本論文は，日本人の口唇，口蓋裂患者の成人における顎，顔面頭蓋骨，ことに，上顎骨および下顎骨の側貌上の状態を明らかにすると共に，口蓋裂の形成手術が，顎，顔面頭蓋骨の發育にどのような影響をおよぼすかを精査し，ひいては，口蓋裂形成手術時期決定にも，指針を得んとしたものである。

すなわち，畿内在住の日本人の口唇，口蓋裂患者成人男子55名と比較基準を得るための健康成人男

子30名とについて、中心咬合位の側方から撮影した側貌レントゲン・セファログラムを用い、従来の方法に改良を加えた前脳頭蓋底基準の分析法により、前脳頭蓋底、後脳頭蓋底、上顎骨、下顎骨、左側上下顎中切歯の各々について、角度的計測、およびトルコ鞍の中心を原点とし、前脳頭蓋底をX軸、これと直交するY軸を設けた直角座標系による線の計測をおこない、更にその成績を統計学的に処理して比較検討をおこなった。

その概要は、口唇、口蓋裂患者の上顎骨が前脳頭蓋底からみて、健康者基準よりも有意の差で、後上方に位置し、又下顎骨においてもほぼ同様の傾向を示し、下顎角は開大しているが、実効長、(Ar-Me)、骨体長(Po-Go)はいずれも短かく、口唇、口蓋裂患者の発育完了形態において、上顎骨のみならず下顎骨にも、明らかに発育阻害のあることが認められた。

口唇裂の既形成手術例中、未口蓋形成手術例のものと、既口蓋形成手術例のものと比較すると、後者の上顎骨、下顎骨、上下顎中切歯は、前者よりも、健康者により近い状態を示し、ことに下顎骨のGonion, Articulare でこれが明らかに認められた。

すなわち本論文は、日本人の口唇、口蓋裂患者成人男子の顎、顔面頭蓋骨の発育状態を矢状断面上において把握し、健康成人男子との比較において、上顎骨のみならず下顎骨にも、明らかに発育阻害があらわれていることを確認し、更に、口蓋裂の形成手術がおこなわれたものにおいては、顎顔面頭蓋骨の発育阻害が比較的少なく、健康者の発育形態により近い様相を呈していたという興味ある事実を認めている。口蓋裂形成手術の早期、晩期についての手術時期決定が、確立されていない現状において、手術時期決定の再検討に一指針を与えたものである。

以上、本論文は今後、この分野における研究の発展のために、貴重な資料を提供した有意義な業績であると思われるものであって、歯学に貢献するところ大であり、歯学博士の学位を受けるに充分資格あるものと認める。